

みんなでつくった田舟が浮かんだよ！

神奈川県葉山町の親子グループが、
昔ながらの工法で田舟づくりに挑戦！

田舟とは、かつて日本の水田で耕作作業に使われていた箱型の小さな和船です。ぬかるみの深い場所で、耕作する人たちに苗や肥料を配ったり、収穫した稲穂を運んだりするときに活躍していました。作業用の舟なので安定性が高く、小回りが効くようにつくられている点が特長です。



完成した田舟で処女航海

この先人の知恵を子供たちに知ってもらい、環境学習に役立てようと、10月25日、神奈川県葉山町の親子グループが田舟づくりに挑戦。完成後の11月1日には実際に地元の海に浮かべ、昔ながらの櫓を使って漕いでみました。

この企画を主催したのは、B & G財団が毎年行っている「海洋教育事業／B & G体験クルーズ」で、ジャック・T・モイヤー博士とともに講師として活躍している、「オーシャンファミリー・海洋自然体験センター」代表の海野義明さんです。海野さんは、モイヤー博士と三宅島で海の環境教育と自然保護に取り組んできましたが、島の噴火による避難のため、現在は故郷の葉山町を拠点にしながら環境教育活動で全国を駆け回っています。こうしたなか、地元では「葉山キッズ」という体験学習会を開いて、地域の子供たちにシュノーケリングを教えたり磯の観察会を行ったりしています。

田舟づくりも、その一環として企画され、横須賀市に住む元航海士の大東五郎さんがボランティアで指揮を取ってくれました。大東さんは、子供の頃に田舟を海に浮かべて遊んだことがあり、そんな楽しい体験を通じて航海士になる夢を抱いたそうです。田舟づくりが始まると、一緒になって作業を手伝う親子に、世界の海を回った体験をいろいろ語ってくれました。

「私は、小学生のときに田舟をつくった経験があります。完成したら、どんなものになるのか不安と期待が入り交り、未知の世界に足を踏み入れるワクワクした気持ちを感じました。いまの子供たちにも、そんな体験をさせてあげられたら嬉しいなと思い、企画してみました」と大東さん。

今回も、大東さんの子供の頃と同様、伝統的な工法でつくることになり、昔ながらの船大工の道具や船釘、張り合わせた板の隙間に埋めて水漏れを防ぐ、巻肌と呼ばれる木の繊維などが使われました。大東さんの指導で道具を握る親子は真剣そのもの。初めての体験で、どんなものが完成するのか、大東さんが子供の頃に体験したように、不安と期待で胸が躍っていました。



慣れない船大工の道具ですが、子供の頃の体験をもとに大東さんが1つ1つ教えてくれました

もともと田舟は1人乗りですが、今回は、みんなが一度に乘れるように、ひとまわり大きい設計となっており、大東さんも、どんな舟になるのか興味津々でしたが、1日がかかりで見事に完成。参加した親子たちはおたがいに肩を抱き合いました。

進水当日、浜に集まった親子は田舟の舳先に御神酒をかけて無事を祈願。海に浮かべると船底から水がにじんてきたので、みんな驚きましたが、板の隙間に埋めた巻肌が水を含んで膨張し始めると浸水は止んでしまいました。先人の知恵には、ただ驚くばかりです。

「木の舟は乗り心地が良いですね。水に馴染んで海面に吸い付くような感じがします」いろいろな船に乗ってきた大東さんも、木の小舟に改めて感心。地元の漁師さんが櫓の漕ぎ方を指導してくれ、田舟に乗った子供たちは想像以上に良く進む櫓の仕組みに感嘆の声をあげていました。

「巻肌や船釘、櫓などは、どんどん昔のものになっていますが、こうした伝統的な技術は受け継がれていくべきだと思っています。先人の苦労、人間が生み出す知恵のすばらしさに触れることができます」自然と触れあう環境教育に力を入れている海野さん。漕ぐことを学んだ今年に続き、来年は帆で走る企画を考えたいと話していました。



みんなで力を合わせて田舟を浜まで運びました



当日は、地元の漁師さんが本物の漁船で櫓の漕ぎ方を指導してくれました。舳先にいるのが、「オーシャンファミリー・海洋自然体験センター」代表の海野義明さんです